

---

# とある転生者の想像実行（イマジネーションエクセキューション）

ぽっポー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イメージションエクセキューション  
とある転生者の想像実行

### 【Nコード】

N99480

### 【作者名】

ぽっポー

### 【あらすじ】

俺は神に無理やり転生させられた、これからどうなるのが不安はない、絶対どうにかする、しかも御坂とフラグが立て放題だ、

## 第零話　始まりの前

ここはどこだろう？

オレは誰なんだろう？

オレ？

オレって何だ？

<考えるのをお止め、楽になりなさい　>

誰だあんた？

でもそうだな

考えるのも疲れた

もう寝よう

楽になろう

『だめだ』

なんだよ、俺は寝むいんだよ

『起きろ』

止めてくれ、寝かせてくれ、オレは疲れた

オレってなんだ？

それより疲れたって何にだ？

分からない、分からないわからないワカラナイワカラナイワカラナイ

『ならこっちに来い』

嫌だいやだイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイヤダイ

ヤダ

『こっちに来いって行っただろ！』

その瞬間、右の二の腕を？まれて引きずり出された

引きずり出された？何から？

それよりこいつは誰だ？ここは何処だ？

そんなことは後だ、現状を確認しよう、さっきまで俺が居た所は銀色の見るからにとろんとしていそうな液体が溜まった沼みたいになっている、そして今居るこの場所は空が真っ青で雲が無いのに太陽が見えない、そして目の前にはさっき沼からオレを引きずり出した張本人と思われる人物が居る、外見の特徴は白髪頭で眼が赤く肌も凄く白い、アルビノってやつだな

『誰が白髪頭だボケ』

だって白髪だもん

『いい加減にしゃがれアホ、もう一回そこに浸かるか？オイ』

『ごめん、てかあんた誰だよ、何で考えてる事がわかるんだよ』

『そらーあれだ、俺が神だからだ』

why?

『why?じゃねーよ、説明をしてやるok or Of cou  
rse?』

『どっち選んだって受けるんじゃないか』

『うるせーよ、じゃあ始めるぞ、お前は死んだ、で俺が助けた、だから転生しろ、ok or of course. ?』

「お前好きだなそれ、て言うか俺はどうして死んだんだ？」

『そつくと思ったよ、ちょっとこっちに来い』

そつ言いながら手招きしてる、行つてやるか

『行つてやるかじゃねーよ、逝くか？逝くのかコラ』

「不吉な響きを出すなよ、？何でバケツなんか持ってたんだ？」

『気にすんな』

ポンッ

そんな軽い音と共に神が俺の頭に手を置いた

その瞬間、俺の中に激痛と共に一気に記憶が流れ込んできた

俺は中学2年であり成績が上の下くらいであった事、部活の帰りが遅くなり一緒に帰っていた友達が信号で飛び出して車に轢かれそうだったのを助けて死んだ事

「あ、ヤベ、超恥ずかしい、何で最後にあんな事言っただろう、超恥ずかしいわ」

こいつ、にやけてやがる、知ってたんだなこの野郎

『そついうなよ、で何処がいい？』

「そりゃとある魔術の禁書目録だろ、てかなんで俺が転生すること

「になったんだ？」

『決まってるだろ、気に入ったからだよ、特に辞世の句が』

ニヤニヤしゃがって、鬱になりそうだ

『願いをかなえてやるよ、いくつでも』

よっしゃー！元氣満タン、傍から見たら多分オーラが出てる、活字なのが惜しいぜこの野郎ー

「一つ目はナルトの万華鏡写輪眼、しかも全部の能力が付いてて絶対に失明しなくて能力を見るとコピーできるやつ、後オリジナルで幾つでも能力を追加できる、二つ目は身体能力が普通の人の500倍くらいほしいな、筋力とか回復力とか、三つ目は思っている事が現実になる能力LV5で、四つ目は血の契約の能力、俺が同意すれば相手がどう思っても力を与えられる」

『ずいぶんとめちやくちな、まあいいか容姿はどうする？』

「お前と同じでいいや」

『お前は神に対する畏敬の念はないのかよ、まあいいそのほかの事はどうする？』

「じゃあ場所は御坂美琴の家の隣、年齢は美琴より二つ上、時期は離乳食が始まった頃、後アフターサービスも頼むぞ」

『わかった、じゃあな』

「あ、またな」

## 第一話 幼少期（前書き）

第二話です

相変わらず駄文です

感想やアドバイスくれたら元気が出る場合があります、てゆーかください（泣）お願いします、

読点の打つところがよく分からない（泣）



## 第一話 幼少期

こんちわ、白崎亮二つす、もうこつちに来て6年が経ったんだ、これまで起こった事を簡単に説明するぜ、パチパチー……なんだらう胸の奥が凄く痛いんだ、母さん助けて、母さんと言えば両親を照会してなかったけ、母さんは普通（？）の主婦、ただ超美人で24歳、何で知ってるかと言うと母さんが寝てる間に母さんの卒業アルバムを見たから、父さんは母さんや近所の人達によるとイケメンで背が高いらしい、何で知らないかって聞くなよ、帰ってこないんだから、いやべつに別居とかじゃなくてアメリカの研究所で働いてるらしい、何を研究してるか知らないし興味も無い、只困る事が一つ、それは……給料の振込みがドルなんだよ！だから月に一回両替に行かなきゃ行けない、手数料取られてるのに普通よりもちよつと贅沢が出来る生活ができるってドンだけ給料もらってるんだよあんたは！



取り乱してすいません、それよりこの6年間何があったか年表に表してみました

6ヶ月：転生

8ヶ月：母さんの年齢を知る

1歳2ヶ月：一人で歩けるようになる

1歳3ヶ月：写輪眼を開眼、近所のネコの心を読む事に成功（なんか懷いて来たので契約後ペットとして家で飼う）

2歳：御坂美琴が誕生

3歳6ヶ月：万華鏡写輪眼を開眼、この時点で会得している術、月読・風蠭螂・神威

4歳2ヶ月：加具土命・イザナギ・神守之盾を会得、また一度に大量の能力を使うと暫らくの間能力の行使はおろか眼を開けることから出来なくなることが発覚

4歳3ヶ月：体術の訓練を開始

5歳：美琴が幼稚園に入園

6歳：大事件発生！

美琴がすんげー懷いてきてる、「一緒に風呂に入ろー」なんて涙ぐ

んだ眼の上目ずかいで見られた時は俺じゃなつかたら死んでたぞホントに、だって鼻血が頸動脈切った（切った事無いけど）みたいに吹き出て骨髓に全力で集中しないと出血多量で死んでたぞ、で大事件つてのが俺に責任がある事なんだ、回想シーンにて説明します

#### 一日目

「ねえりょーにい、あそぼ？」

「ごめん、今日は無理なんだ、また明日遊ぼうね」

#### 二日目

「ねえりょーにい、きのうあしたあそぼうねっていったよね？」

「ごめん、今日も無理なんだよ、明日こそあそぼうね」

#### 遠足の前日

「ねえりょーにい、きのうもそのまえもきょうあそぼっていったよねえ？あしたえんそくだからおかしかいにこうよ」

「ごめん、ホントに無理なんだって遠足から帰ってきたら遊んでやるから、な？」

「もういいもん！べーだ」

「あちよ、待てって美琴！」

とまあこんな風になってしまったのである、なぜこうなったかと言うと俺が万華鏡の修行に熱中しすぎて美琴の相手ほっぽらかしてたのだある、これが原因であんな事になるなんてだれも思いもしなかったと思う

遠足当日、俺が家に帰ってみると母さんが深刻な顔をして待っていた

「母さんどうしたんだよ？そんな顔して」

母さんは更に深刻な顔をしていった

「落ち着いて聞いてね亮二、美琴ちゃんが見つからないのよ」

さすがの俺もビックリして眼を見開いた

「どう言つ事だよお袋」

母さんは説明を始めた

「あのね、山の頂上でお昼を食べてるときに居なくなったらしいの、何やってるの亮二？」

俺は下着になってプロテクターを付けて強化繊維の長袖長ズボンを着て、真つ黒の上着を着て黒くて細長い布を顔と頭に巻きレンズが真つ黒いゴーグルをはめ、黒い革の手袋をはめながら答える

「何って準備だよ、それより山までの地図を見せてくれ」

黒いサバイバルブーツを超きつく履きながら母さんの答えを聞く

「これよ」

そついいながら地図を出してくる、ちなみにこの人、万華鏡の事を知ってたりする、俺は地図を一瞥して言う

「いつてくる」

それだけ言うと神威を使って山まで飛ぶ

もう薄暗くなった山では保育員だけでなく警察も少しいる、これは早くしないとやばいなと思い、万華鏡を使って動いているものを探しているとすぐに見つかった、そして神威でそこまで飛ぶとホントに危ないところだった、ペタリと座り込んでいる美琴に向かって熊が爪の付いたその腕を振り上げていた

「なにやってんだ、毛玉」

殺気と威圧をかなり盛り込んで言い放つと熊は動きを止めて震え始めた

「美琴もこんなところで何やってんだ？」

美琴はこれで俺だって分かったみたいだ

「りょーにいい、りょーにいい！わあああんりょーにいい！」

泣きじゃくりながらこっちに来て腰に抱き付いてきた、それを無言で頭をなでて後ろに押しやる

「少し下がってろ」

それだけ言うと美琴は5歩くらい後ろに下がった、熊は少しこっちを振り向いて俺とは反対方向に走り出した、もちろん俺が逃がすはずが無い、神威で前に回って風蟻螂で左肩を少し深く切りつける

「グオオオオオオオオ！！」

と言いながら立ち上がった、そして右腕を丸ごと斬る、返り血で服が汚れるが関係ない

「終わりだ」

この一言と共に神威で頭を飛ばす、今度は返り血を頭から被ってしまふ

「さあ帰るぞ、美琴」

読んだが返事がないので言ってみると地面に横になって寝ていた、しょうがないのでおんぶして山を降りることにした

「君何をやってるんだ！それは・・・血じゃないか！どうしたんだ！」

出ました警官A、は無視して保育員さんを探す、いた美琴のクラスを受け持ち、俺だって気付かれないように声を少し低くして呼ぶ

「なあ、その保育員」

それに反応してこっちを向いた、最初は熊の返り血にビックリしていたが美琴に気付いて更に驚いたようだ

「そ、その子をどこで？」

「山の中、じゃな」

それだけ言って神威で家に飛んだ、上着を脱ぎ捨ててベッドに横に

なつた時点で俺は意識を手放した



## 第一話 幼少期（後書き）

風蟪蛄とは最強の斬撃、視界にあるものならどんな物での切裂ける、また空間に直接働きかけるため一方通行にも防げない、が衝撃波を前に真直ぐ飛ばすため、神守之盾に当たるか術氏の視界から消えるか術氏が消さないと消えない

神守之盾は最強の防御、好きな場所に好きな規模で好きな時間透明な盾を形成できる、そしてそれ相応の疲労を伴う、風蟪蛄を防げる唯一の盾

また亮二は二歳の時からずっと枷をつけており常に全力の2割が全力の状態

## 重要なお知らせ

誠に勝手ながら本小説を終了させて頂きます

理由を説明させていただきますと

一つ目が主人公を強くしすぎました

二つ目ですがアイデアは浮かんでいますがそのアイデアはこの主人公では実現不可能であります

理由はほかにもいくつかありますがここでは説明を省かせていただきます

新しい小説の名前は既に決まっております

設定などの殆んど物を引き継がせていただきます  
どうか悪しからずご了承ください

簡易キャラ設定

白崎良哉

白髪紅眼

演算能力がずば抜けて高い、樹木の設計者の5倍ぐらい、別名万物  
オールシングスタイアグラム  
の設計者命名上条

能力：創造神パーソナルエリア（自分だけの領域）（半径20m）  
クリエーションポイント  
を常に展開しその中の物なら分子単位で理解でき、パーソナルエリアの半径の半分の領域で再構築、自分に直接触っている、または特殊な物を通じて関節的に触れている場所で分解・分子の創造ができる

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9948o/>

---

とある転生者の想像実行（イマジネーションエクセキューション）

2010年11月25日04時42分発行